（様式１－１）

① 申請者	館林市	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E

③ タイトル

（ふりがな） さとぬま —いのり・みのり・まもりのぬまがみがきあげた たてばやしの ぬまべぶんか—

里沼(SATO-NUMA) —「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化—

④ ストーリーの概要（２００字程度）

関東の山々が一望できる館林では、今も多くの沼と出会うことができる。館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育(はぐく)まれてきた「里沼(さとぬま)(SATO-NUMA)」であった。館林の里沼は、沼ごとに特性が異なる。その歴史を紐解くと、里沼の原風景と信仰が共存する茂林寺沼(もりんじぬま)は「祈りの沼」、沼の恵みが暮らしを支えた多々良沼(たたらぬま)は「実りの沼」、館林城とつつじの名勝地(めいしょうち)を守ってきた城沼(じょうぬま)は「守りの沼」と言い換えることができる。館林の里沼を辿(たど)れば、それぞれの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わい、体感することができる。

茂林寺沼及び低地湿原

多々良沼越しに望む富士山

城沼とつつじの名勝地「躑躅(つつじ)ヶ岡(がおか)」

創業期日清製粉館林工場事務所

旧秋元別邸

鯰(なまず)の天ぷら・うどん

（様式１－２）

市町村の位置図（地図等）

群馬県館林市へのアクセス

ぽんちゃん

電車でのアクセス

浅草駅 → 東武伊勢崎線 特急で約60分 → 館林駅

伊勢崎駅 → 東武伊勢崎線 約60分 → 館林駅

▶東武伊勢崎線にて、
浅草から特急で約60分
伊勢崎駅から約60分

Tobu Isesaki Line:
About 60 minutes by express train from Asakusa Station
About 60 minutes from Isesaki Station

搭乘東武伊勢崎線
由浅草搭乘特急列車約60分鐘
由伊勢崎站約60分鐘

お車でのアクセス

前橋IC
関越自動車道 約15km(約15分)
高崎JCT
北関東自動車道 約30km(約35分)
太田桐生IC
一般道 約15km(約25分)
館林市内

浦和IC
東北自動車道 約40km(約30分)
館林IC

宇都宮IC
東北自動車道 約60km(約50分)
館林IC

（様式１－２）

構成文化財の位置図（地図等）

茂林寺沼エリア＝「祈りの沼」

多々良沼エリア＝「実りの沼」

（様式１－２）

城沼エリア１＝「守りの沼」

城沼エリア２＝「守りの沼」

ストーリー

里沼(SATO-NUMA)　―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―

【里沼】沼は、古代・万葉の頃には「隠沼」と詠われ、水辺の草木に囲まれてひっそりとした佇まいを持ち、人を寄せつけない神聖な場であった。いつしか、人々が沼に近づき集う中で、暮らしと結びつき、沼と共生した生業や文化が生まれ、沼は「里沼」となった。

　里沼は、自然と暮らしが調和した生活文化を今に伝える、我が国の貴重な財産である。新田開発や近代化の波にもまれ、各地から沼が消え去りつつある今、館林では、時を重ねながら、それぞれの特性を磨いてきた、希少な里沼を見ることができる。

館林の地形と沼

❶里沼(SATO-NUMA)

❖館林では、冬の朝夕に白鳥たちが沼から沼へと雁行する光景を目にすることができる。大小の河川が網目のように広がる関東平野には、かつて多くの沼が存在したが、近世以降のさまざまな開発によってほとんどが姿を消し、耕地や工場用地、宅地などに変わった。しかし、館林には茂林寺沼・多々良沼・城沼をはじめ、近藤沼・蛇沼など今も大小の沼が存在し、沼辺を行き交う水鳥たちの良い棲みかとなっている。

❖ 利根川と渡良瀬川に挟まれた館林の地形は、標高 20m を境に低地と台地からなる。台地に入り組んだ谷から自然に湧き出た水は低地で滞留し、堰き止められて多くの沼が生まれた。その沼の畔に人の手が加わることで、館林の「里沼」の歴史が始まった。

白鳥の雁行風景(城沼)

茂林寺の山門

❷「祈りの沼」～里沼の原風景を残す茂林寺沼～

❖かつて、河川や沼の水辺には湿地や湿原が広がり、その周りには平地林が見られた。沼や湿原には、鯉や鮒、トンボなどの水生動物や昆虫、菱や藻などの水草や湿原の植物が生息し、沼辺の平地林は狸や蛇、野鳥などの棲みかとなっていた。このような水をとりまく自然環境は、平野の都市部では開発によってほとんど見られなくなっている。しかし、周辺が宅地化された今も、茂林寺沼にはその原風景が残されている。沼辺にはコウホネ、カキツバタ、ノウルシなど希少種の植物が自生し、関東地方でも数少ない貴重な低地湿原となっている。

❖茂林寺沼には、なぜ今も原風景が残っているのか？そこには、600 年前に開山した古刹・茂林寺の存在がある。沼の畔に曹洞宗の信仰の拠点「祈りの場」が生まれることにより、人々の自然を畏怖する気持ちが高まり、「祈りの沼」としての静謐さが受け継がれてきた。いつしか人々は、その沼を茂林寺沼と呼ぶようになった。そして、寺に伝わる貉(狸)の古譚「ぶんぶく茶釜」のなかで、和尚が貉の化身であったり、狸が茶釜に化けるなど、人と動物とのかかわりが今もユーモラスに語り継がれている。

茂林寺に伝わる茶釜

❖茅葺き屋根の本堂や山門をもつ茂林寺は、その葺き替えに沼茅(葦)を利用してきた。人々は繁茂する葦を刈ることで沼の生態系を維持し、茂林寺沼は「里沼」として人との共生が保たれてきた。今も人々の祈りの姿が途絶えることのない寺と、希少な動植物の棲みかの沼との共存が図られている。

多々良沼と松林

❸「実りの沼」～ “麦都”館林を支えた多々良沼～

❖多々良沼とその沼辺に細長く連なる松林。そこには「たたら」の地名の由来となった古い時代の製鉄の痕跡と、500 年前の開拓者大谷休泊による植林と用水堀開削の歴史が刻まれている。多々良沼は、人々の暮らしを支え

大谷休泊の墓

る生業の場としての「里沼」へと拓かれてきた。

❖沼からの用水によって潤された田畑は、米と麦との二毛作が可能となり、江戸時代には館林藩から将軍家へ小麦粉が献上されたように、館林は麦の産地となった。明治期になると麦を生かした近代製粉業や醸造業が興り、“麦都”となった館林では、麦を原料とした麦落雁やうどん、醤油が名産品となった。「里沼」による水と大地の恵みは、多々良沼を「実りの沼」へと進化させ、現代の館林の食品産業の興隆へと結実している。

❖「実りの沼」は漁労の場としても人々の暮らしを支え、鯰の天ぷらや鯉の洗い、鮒の甘露煮など沼の幸を活かした個性ある食文化をもたらした。長年培われてきた様々な味わいは、里人たちの貴重なたんぱく源となり、もてなしや晴れの日の料理として今も暮らしに根付いている。

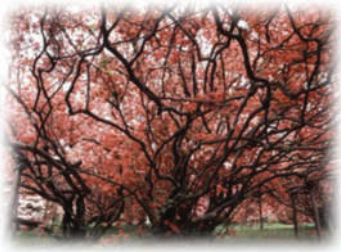
沼の幸・川魚料理

館林城三の丸土橋門

❹「守りの沼」～城と躑躅ヶ崎を守ってきた城沼～

❖550 年前、周囲 5 ㎞の東西に細長い城沼を天然の要害として館林城が築かれた。城沼は館林城の建つ台地を取り囲む外堀の役目をし、武将たちにとって「守りの沼」となった。沼によって守られた堅固な城は、近世になると江戸を守護する要衝として、徳川四天王の榊原康政や、五代将軍となる徳川綱吉の城となり、守りを固めるための城下町を広げ、その周囲に水を引き入れ、堀と土塁で囲った。

❖「守りの沼」には、二つの伝説が生まれた。一つは龍神伝説である。沼に人を寄せつけないため、城沼は沼の主・龍神の棲む場となり、城下町にはその伝説を伝える井戸が残る。もう一つはつつじ伝説である。今から 400 年程前、「お辻」という名の女人が龍神に見初められ、城沼に入水した。それを悲しんだ里人は沼が見える高台につつじを植え、その地を「躑躅ヶ崎」と呼んだ。歴代の館林城主はそこにつつじを植え続け、花が咲き誇るようになった高台を築山に、城沼を池に見立てた雄大な回遊式の大名庭園を造り上げた。城主によって守られてきた躑躅ヶ崎は「花山」とも呼ばれ、花の季節には里人たちにも開放された。


つつじ古木群

龍神伝説の竜の井

渡し舟が起源　花ハスクルーズ

❖明治維新後の近代化は、「守りの沼」を大きく変貌させた。江戸時代に禁漁区となって人を寄せつけなかった城沼は、里人たちに開放されて漁労や墾田、渡船などが営まれ、「里沼」としての歴史を歩み始めた。

正田醤油正田記念館

❺「もてなしの心」へと磨き上げられた館林の沼辺文化

❖近代化による「守りの沼」の変貌は、城沼と景観を一つにしていた「躑躅ヶ崎」も大きく変えた。それまで城主によって守られていた「躑躅ヶ崎」は、町人や村人たちの努力によって、公園「つつじが岡」として行楽地に生まれ変わり、400 年前に植えられたつつじは貴重な古木群となり、名勝として甦った。多くの人々が訪れるようになった沼辺には、行楽客を迎え入れるための文化が集約され、「もてなしの心」が芽生えた。

❖近代化によって城下町で成長した製粉・醤油醸造・織物などの会社は、内外の客を迎えるもてなしの場として「つつじが岡」を利用した。東武鉄道の開通と館林出身の文豪田山花袋が記した旅の案内書は、沼辺にある「つつじが岡」と茂林寺へと多くの人々を誘った。さらに「実りの沼」がもたらした名産品の麦落雁やうどんは、手軽な館林土産として広く知られるようになり、里沼の特性を活かした「もてなしの心」が根付いた。

旧館林二業見番組合事務所

❖館林の沼辺に佇むと、赤城山や日光連山、遠くは筑波山・富士山を眺望できる。「祈りの沼」「実りの沼」「守りの沼」、それぞれ特性を持って、多彩な文化を生み出してきた館林の「里沼(SATO-NUMA)」。その特性は明治の近代化以降、「もてなしの心」へと磨き上げられ、館林の沼辺文化として今も受け継がれている。

田山花袋旧居

（様式３－１）

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 （※１）	指定等の状況 （※２）	ストーリーの中の位置づけ（※３）	文化財の所在地 （※４）
①	茂林寺沼及び低地湿原	県天然記念物	館林市の南部にある周囲約 1 kmの沼とその周囲に広がる低地湿原。なかでも低地湿原は関東平野に残る数少ないもので、今も自然環境を良好に残す。希少種のコウホネやカキツバタなどの水生・湿原植物、トンボなど湿原の貴重な動物が生息し、古刹・茂林寺とともに「祈りの沼」の景観を醸し出している。	
②	茂林寺(分福茶釜)	未指定 (建造物)	応永33 年(1426)、茂林寺沼の畔に「祈りの場」として開山した寺院。江戸時代の茅葺屋根の本堂と山門があり、茅は茂林寺沼の葦が使用されてきた。貉(狸)の化身である守鶴がもたらしたという茶釜「分福茶釜」が伝わり、明治時代の巌谷小波の童話で全国に知られるようになった。山門前には狸像が並び、境内には童話を伝える巌谷小波の詩碑がある。	茂林寺
③	茂林寺のラカンマキ	県天然記念物 (植物)	茂林寺の本堂前にある樹齢約 600 年、樹高 14m の巨木。茂林寺の開山とともに、刃先が尖っているため魔除けとして植えられ、「祈りの場」となった歴史を伝える。	茂林寺
④	堀工町のどんど焼き	未指定 (年中行事)	江戸時代から続く行事で、茂林寺沼近くにある熊野神社の神事として行われていた。現在は地区の行事として、毎年 1 月 15 日に近い日曜日に、古いお札やだるまなどを焚いて、1 年間の無病息災を祈る。お焚き上げのヤグラは、茂林寺沼で刈った葦やナスガラなどを積み上げて作られる。	堀工町 ふれあい 広場
⑤	多々良沼	未指定 (名勝地)	館林市の西北部にある周囲約 7 kmの沼で、平安時代に行われた蹈鞴(たたら)製鉄から名付けられたという。中世の開拓者大谷休泊により多々良沼から用水が開削され、その水で潤された台地では米麦の二毛作が盛んとなり、肥沃な穀倉地帯を育んだ。この「実りの沼」からとれる鯉や鮒、鯰や鰻などは、里人の貴重なたんぱく源となった。	
⑥	多々良遺跡(カナクソ)	未指定 (遺跡)	多々良沼北岸にある遺跡で製鉄生産址と伝わる。現在の日向漁港の沼辺では、冬に水位が下がると、「カナクソ(金糞)」と呼ばれる製鉄の時に出された鉱滓を見つけることができる。	野鳥 観察棟

⑦	内陸古砂丘	未指定 (地質鉱物)	利根川が形成した自然堤防の砂層で、館林市南西部から多々良沼東岸まで続く。砂鉄を豊富に含み、多々良沼の伝説につながる製鉄時の砂鉄や薪などの資源供給地点となった。古砂丘斜面の松沼町遺跡からは古代の炭焼窯跡が発見された。	
⑧	大谷休泊の墓	県史跡 (遺跡)	中世の開拓者大谷休泊の墓。戦国時代の館林城主長尾顕長の招きに応じて領内に住み、渡良瀬川からの用水(上休泊堀)と多々良沼からの用水(下休泊堀)を引いて、周辺の田畑を潤した。多々良沼周辺の松林は大谷休泊の植林事業によるものである。	
⑨	上三林のささら	市無形民俗 (民俗芸能)	館林市南西部の上三林町に伝わる民俗芸能。多々良沼からの用水によって、二毛作が盛んとなった地域で、江戸時代中期から五穀豊穣と厄病神追払の祭事として行われてきた。町内の雷電神社の祭礼に合せて棒術と獅子舞を奉納しながら、地区内を巡行する。	上三林 雷電神社
⑩	封内経界図誌	県重文 (歴史資料)	安政２年(1855)に館林城主秋元志朝によって作成された領内 52 か村の彩色村絵図。村ごとに土地利用が色分けされ、江戸時代の沼の形が一目でわかる。河川や田畑、集落の範囲も描かれ、人々の暮らしと沼との関わりを知ることができる。	館林市第一資料館
⑪	沼の漁具と日向舟	未指定 (有形民俗)	館林市内の沼では、広く網を仕掛けて、舟に乗って集団で行う追い込み漁のほか、ハズ漁・ヤス漁などが行われ、さまざまな漁具が生まれた。沼によって使用する舟も形が違い、多々良沼の舟は、冬に凍結した氷から舟べりを保護するために一枚板を取り付けており、「日向舟」と呼ばれている。	館林市第一資料館
⑫	川魚料理 (鯰・鯉・鮒・鰻料理)	未指定 (無形民俗)	沼が点在する館林地域では、昔から鯰・鯉・鮒・鰻などの川魚料理が食されてきた。館林のもてなし文化の特徴として、川魚料理をふるまうことがある。中でも鯰が有名で、天ぷらや小麦粉をあえて揚げたタタキアゲは、この地域の代表する料理となっている。	
⑬	城沼	未指定 (名勝地)	館林市中央部にある、周囲約５kmの東西に細長い沼。西岸に館林城が築かれ、江戸時代は人を寄せつけない「守りの沼」となっていた。南岸に名勝「躑躅ヶ岡」があり、北岸には「つつじ伝説」を伝える善長寺がある。春はつつじ、夏は花ハス遊覧を楽しむことができ、沼辺を周遊する「文学の小径」や「朝陽の小径」では、四季折々の景観を見ることができる。	

⑭	上毛館林城沼所産水草図	市重文 (絵画)	江戸時代末(1845 年)に描かれた巻物で、当時の城沼に生息していた水草などを描いた彩色図譜。オニバス、ジュンサイなど 12 種類の花や藻などが見られ、今は消滅した城沼の動植物を知ることができる。	館林市第一資料館
⑮	館林城跡 (三の丸土橋門・城沼墾田碑)	市史跡 (城跡)	館林城は城沼を要害とした城で、沼に突き出た台地の地形を巧みに利用して造られた。三の丸には江戸時代の土塁が残り、復元された土橋門と一体となって城跡の面影を伝える。また、明治維新後の旧藩主による城沼開拓に関わる記念碑がある。	
⑯	尾曳稲荷神社	未指定 (建造物)	城沼を望む台地上にあり、館林城築城の白狐縄張り伝説に由来する神社。城の鬼門(北東)となる稲荷郭に位置し、館林城の鎮守となった。境内には館林城改修で奉納された手水鉢や、城沼の景観を詠んだ館林出身の文豪田山花袋の歌碑がある。	
⑰	館林城絵馬	市重文 (絵画)	幕末の館林の浮世絵師北尾重光が、館林城と城沼を描いた極彩色の絵馬。明治６年(1873)に尾曳稲荷神社に奉納された。城沼が鮮やかな青色で塗られ、城の建物が沼に浮かぶように描かれ、「守りの沼」を鳥瞰することができる。	尾曳稲荷神社
⑱	躑躅ケ岡(躑躅) [つつじが岡公園]	国名勝	城沼南岸にあるつつじの名勝地。城沼に入水した女人「お辻」を偲んでつつじが植えられた伝説があり、歴代の館林城主の保護のもとで、回遊式の大名庭園となった。樹齢 800 年を超えるヤマツツジやキリシマツツジの古木群など約１万株のつつじが植えられ、城沼と一体となった景観は、「花山」と呼ばれ親しまれている。	つつじが岡公園
⑲	善導寺(榊原康政の墓)	県史跡(＊榊原康政の墓)	城沼北東岸にある、近世初代城主榊原康政の菩提寺。榊原康政は、沼に面した館林城をより堅固な城にするため、台地上に城下町を整備し、周囲の低湿地を開発して治水・利水事業を進め、守りを一層固めた。境内には康政をはじめとする榊原家の墓所があり、城と城沼の歴史を物語る。	
⑳	善長寺(祥室院殿の墓、お辻・松女の墓)	市史跡(＊祥室院殿の墓)	城沼北岸にある寺院で、沼の対岸に名勝「躑躅ヶ岡」がある。境内にはつつじを愛でたという榊原忠次の母「祥室院殿の墓」や、「つつじ伝説」を伝える「お辻・松女」の供養墓がある。つつじの季節には、対岸のつつじが岡を結ぶ渡船が運航される。	
㉑	竜の井・青龍の井戸	未指定 (遺跡)	城下町に残る城沼に関わる井戸。竜の井は城下町にあった時の善導寺の境内にあり、女人の姿をした城沼に棲む龍神の妻が、寺の説話を聞いて井戸に姿を消した伝説が残る。竜の井と城沼の間にはもう一つの青	

			龍の井戸があり、徳川綱吉が館林城主の時に、この井戸から女官姿の清瀧権現が姿を現したといわれる。井戸の水は霊水として珍重されてきた。	
㉒	旧館林藩士住宅	市重文 (建造物)	館林城に仕えた藩士の武家屋敷。茅葺き屋根の建物で、館林藩士の暮らしの様子を伝える。屋根の茅は、沼茅(葦)が主に利用されてきた。明治維新後、士族授産による城沼の開発に多くの館林藩士たちがかかわった。	鷹匠町武家屋敷「武鷹館」
㉓	古蹟洗堰	未指定 (遺跡)	城沼の水を排水し、水位を調節するための堰。「洗堰」の由来は、中世の武将楠木正成が敗死し、その首を持って逃げてきた家臣たちがこの堰で首を洗ったという伝説による。堰の脇に石碑と楠木神社が建つ。現在、城沼の水はこの堰から鶴生田川・谷田川を経由して渡良瀬川に流れ込む。	
㉔	竹生島神社	未指定 (建造物)	江戸時代は城沼の入り江となっていた場所で、弁天が祀られて「浮島弁天」と呼ばれ、明治期に城下町の近江商人によって琵琶湖の竹生島神社を勧請した。境内に昭和初期に行われた城沼耕地整理記念碑があり、低湿地開拓の歴史を物語る。	
㉕	城沼の渡し舟	未指定 (無形民俗)	城沼の渡し舟は、明治時代の館林駅開業によって、駅からつつじが岡へ向かう最短ルートとして行楽客に利用された。昭和初期まで竹生島神社脇に「弁天の渡し」があったが、現在は「尾曳の渡し」と「善長寺の渡し」から運航され、７・８月には花ハスクルーズの遊覧船が運航される。	
㉖	小室翠雲画 「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」	未指定 (絵画)	館林出身の画家小室翠雲が、明治 28 年(1895)に描いた彩色画。「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」と題し、城沼とつつじが岡に集う人々が描かれ、明治時代の沼辺景観を見ることができる。	館林市第一資料館
㉗	旧秋元別邸	未指定 (建造物)	館林最後の城主秋元氏ゆかりの和風建築物で、明治末期に城沼を望む館林城の八幡郭に建てられた。主屋に広間があり、離れ座敷に茶室と洋館がある。庭園には沼で投網をする秋元氏の銅像があり、つつじや花菖蒲、モミジなどが植えられている。四季を通じて沼辺文化を彩る、館林の迎賓館としての役割を果たしている。	つつじが岡第二公園
㉘	正田醤油㈱旧店舗・主屋[正田記念館]	国登録有形 (建造物)	城下町で江戸時代から商家を営む正田家は、「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦や大豆を材料にして、明治６年(1873)に醤油醸造を開始した。正田記念館は嘉永６年(1853)建築の店舗・主屋で、正田家の歴史と醤油醸造に関する資料が展	正田記念館

			示されている。	
㉙	東武鉄道館林駅	未指定 (建造物)	明治40年(1907)に東武鉄道が川俣から足利まで開通した際に開業。駅舎は昭和 12年(1937)建築の木造 2 階建てモルタル瓦葺で、正面中央に時計をはめこんだ意匠が特徴。明治末期から城沼とつつじが岡を訪れる行楽客の玄関口となってきた。	
㉚	創業期日清製粉館林工場事務所［製粉ミュージアム本館］	未指定 (建造物)	明治43年(1910)に日清製粉株式会社館林工場の事務所として建てられた木造２階建ての洋風建造物。「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦を原料として、日本近代製粉業発展の歴史を伝える。創業110 周年を記念して製粉ミュージアム本館として公開された。	製粉ミュージアム
㉛	旧上毛モスリン事務所	県重文 (建造物)	明治42年(1909)に、城沼を望む館林城二の丸跡に建設された毛織物工場の事務所で、木造２階建ての洋風建造物。近代館林の産業発展を支え、城沼の守りを生かした工場群となっていた。花の季節には、従業員の慰安でつつじが岡へと繰り出した。	館林市第二資料館
㉜	分福酒造店舗 [毛塚記念館]	国登録有形 (建造物)	江戸時代から、城下町で酒造業を営んでいた木造２階建ての商家。建物の脇に「龍水の井戸」と呼ばれる井戸があり、かつて「龍水」という銘柄の清酒を醸造・販売していた。里沼の水源となる良質な地下水により、城下町に酒造業が発達した。	毛塚記念館
㉝	旧館林信用金庫[市役所市民センター分室]	未指定 (建造物)	大正末期に発足した館林信用金庫の近代建物。昭和９年(1934)建築で、鉄筋コンクリート造２階建て、タイル貼りの外壁や入口の装飾が特徴。大正から昭和初期にかけて町の経済発展を担い、沼辺のもてなし文化の原動力となった。	市役所市民センター分室
㉞	旧館林二業見番組合事務所	国登録有形 (建造物)	昭和13年(1938)建築の、芸妓置屋と料理店業を兼ねた「二業見番組合」の事務所。木造２階建ての重厚な瓦屋根が特徴で、２階に芸妓の稽古用の舞台と広間があり、昭和前期の館林の花街の中核となった。花の季節にはつつじが岡で館林の芸妓たちが行楽客を迎え入れ、沼辺のもてなし文化に華を添えた。	
㉟	田山花袋旧居	市史跡	江戸時代後期に建てられた茅葺き屋根の武家屋敷で、館林出身の文豪田山花袋が、明治初期の少年期に過ごした。花袋は城沼や城跡の風景をこよなく愛し、小説「ふるさと」にはこの家や城沼の景観が克明に描かれている。	館林市第二資料館

㊱	田山花袋関連資料 （田山花袋記念文学館）	未指定 （歴史資料）	城沼を間近に望む田山花袋記念文学館には、代表作『蒲団』『田舎教師』などの初版本のほか、原稿、書簡、日記、愛用品など、田山花袋に関する資料約１万点が所蔵されている。展示室には、小説「ふるさと」の自筆原稿と城沼の古写真があり、沼辺を愛した花袋文学の世界へといざなう。	田山花袋記念文学館
㊲	館林のうどん	未指定 （民俗）	江戸時代に「饂飩粉」（小麦粉）は館林藩の特産として将軍家への献上されていた。「里沼」と利根川・渡良瀬川がもたらす豊富な水資源が小麦栽培に適した肥沃な大地を生み、長い日照時間と赤城おろしと呼ばれるからっ風による乾燥した気候からうどんの産地となった。“麦都”館林のもてなし文化に欠かせない名産品である。	
㊳	麦落雁	未指定 （民俗）	大麦粉を利用して作られた麦落雁は、館林を代表する銘菓で、文政年間(1818～30)に完成して以来、館林城主献上の栄を賜ったという。城下町に根付いた茶道菓子から発展し、明治時代には「つつじが岡」の園内で館林名産として販売され、沼辺のもてなし文化を彩るものとなった。	

（※１）文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

（※２）指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

（※３）各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

（※４）ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。

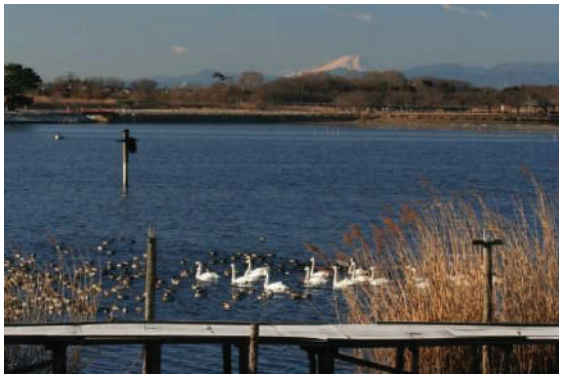
構成文化財の写真一覧

①茂林寺沼及び低地湿原

④堀工町のどんど焼き

②茂林寺(分福茶釜)

⑤多々良沼



⑥多々良沼遺跡(カナクソ)

③茂林寺のラカンマキ

⑦内陸古砂丘

⑧大谷休泊の墓

⑨上三林のささら

⑩封内経界図誌

⑪沼の漁具と日向舟

⑫川魚料理(鯰・鯉・鮒・鰻料理)

⑬城沼

⑭上毛館林 城沼所産水草図

⑮館林 城跡(三の丸土橋門・城沼墾田碑)

⑯尾曳稲荷神社

⑰館林 城絵馬

⑱躑躅ヶ岡(躑躅)[つつじが岡公園]

⑲善導寺(榊原康政の墓)

⑳善長寺(祥室院殿の墓、お辻・松女の墓)

㉑竜の井・青龍の井戸

㉒旧館林藩士住宅

㉓古蹟洗堰

㉔竹生島神社

㉕城沼の渡し舟

㉖小室翠雲画「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」

㉗旧秋元別邸

㉘正田醤油㈱旧店舗・主屋[正田記念館]

㉙東武鉄道館林駅

㉚創業期日清製粉館林工場事務所
[製粉ミュージアム本館]

㉛旧上毛モスリン事務所

㉜分福酒造店舗[毛塚記念館]

㉝旧館林信用金庫
[市役所市民センター分室]

㉞旧館林二業見番組合事務所

㉟田山花袋旧居

㊱田山花袋関連資料
[田山花袋記念文学館]

㊲館林のうどん

㊳麦落雁

日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
７０	里沼(SATO-NUMA) ―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―

（１）将来像（ビジョン）

【日本遺産認定以降の振り返り】

日本遺産「里沼」は、本市では古くより存在していた五つの沼と、その沼辺で育まれてきた沼辺文化を彩る場所や物などの構成文化財で構成されており、地域における普遍性から新たに見出した独自性をストーリーの骨格としている。令和元年度の認定以降、「館林市第６次総合計画」での将来都市像に「里沼の息づく 次世代へ安心をつなぐ 暮らしやすいまち 館林」を掲げ、“沼辺の多様性”を地域特色としそれを次世代に継承するための“持続可能なまちづくり”実現を目指し、各方面で日本遺産「里沼」を推進する事業を実施してきた。

特に小・中学校の総合学習においては「里沼」がテーマとして取り上げられる機会も年々増加し、累計 85 回の出前授業等を行ってきた結果、認定６年目となる令和６年度には市内小・中学生における日本遺産「里沼」の認知度 92.16%を記録するといった“次世代への継承”のための大きな成果を挙げることが出来た。また、これまでは未計測であった沼への来訪者数の調査にも取り組み、年間に約 159 万人(令和５年度調査値)の来訪があることを把握できたものの、日本遺産を活用しての地域経済の活発化については、イベント開催時を除いてはそこで消費活動に繋がるコンテンツに乏しく、来訪者数の多さに反して伸び悩んでいる現状もある。

しかしながら、近世の新田開発や近代以降の干拓により全国で多くの沼が姿を消してきたなか、一つのまちに五つもの沼が残っていることは稀有であり、この地域の人々にとって沼がかけがえのない宝であり誇るべき資源であることの証左と言える。

【目指すべき将来像】

館林市では本計画により、日本遺産「里沼」の構成文化財である各沼をはじめとした文化財の適切な保存と継承、魅力ある観光資源としての活用がなされることで、更なるシビックプライドの醸成と地域経済の活発化に繋がり、地域の宝であるこの沼辺で、世代や地域を超えた新しい交流が生まれている姿を将来像として設定する。

【地域住民・民間事業者・来訪者の在り方】

引き続き地域の子どもたちを中心としながら、さらに幅広い世代へ普及活動を続ける。それにより多くの地域住民に日本遺産「里沼」のまちの一員であるという当事者意識を根付かせ、行政と住民が一丸となっての文化資源の保存と継承を目指す。また、民間と協力したおもてなし施設の整備を進めながら、日本遺産ブランドを活用したサービス・商品などの消費コンテンツの開発を支援することで地域の魅力を増強する。そのうえでこれを的

確に発信することで海外を含む外部からの来訪者を獲得し、観光や産業面での活性化を図る。それらの積み重ねにより、「里沼」を訪れた方にも特色あるストーリーや景観などを体感していただき、シビックプライドが醸成され、地域住民と民間事業者の更なる意識とサービスの向上に繋がるという、より良い循環が生まれていくことを想定する。さらに、地域経済の面では、これら「里沼」に関わる資源やストーリーを付加価値として観光に昇華させ、単なる「コト消費」だけでなく自然や文化・暮らしと紐づけた「イミ消費」「トキ消費」へ誘導することで滞在幅を拡充し、「リトリート」による地域内での消費循環を目指したい。

【地域の長期的構想における日本遺産の位置付け】
総合計画以外の長期構想においても、「第２期まち・ひと・しごと創生人口ビジョン・総合戦略」では、人が集う安心して暮らすことができる魅力的な地域をつくるために、日本遺産を活用した地域の魅力発信や環境整備を行うことを基本的方向とし、市民と行政と関係団体が一体となって公民が連携し、文化財の活用や地域活性化に取り組むことが明記されている。「館林市文化財保存活用地域計画」においての目指すべき将来像も「里沼のまち・館林市文化財未来ビジョン ―つなぐ文化財×つながるまちづくり―」 として、「里沼学」の確立を目指して研究の推進と支援を行い、その成果を公開するなどをはじめ、「日本遺産「里沼」の推進」を重点目標としている。「館林市つつじが岡公園再整備基本計画」では日本遺産認定を契機として、休止していた城沼のサイクリングターミナルの再開や、茂林寺沼の未供用公園用地の活用を進めている。このように館林市では日本遺産「里沼」を中心として各種構想が組まれており、今後の地域活性化において必要不可欠な位置に据えられている。

（２）地域活性化計画における目標

※各目標に対し、複数の指標を設定可

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①－Ａ：日本遺産「里沼」コンテンツを体験した人のアンケートによる満足度の割合（%）

年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	―	―	―	90	90	90

指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	コンテンツ体験者へのアンケート調査を新たに実施し、その満足度を指標とする。指標値については高水準の満足度を保持するものとする。

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること						
指標②－Ａ：小・中学生における「日本遺産」里沼の認知度の割合（%）						
年度	年度			年度		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	87.29	91.85	92.16	90	90	90
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	小・中学生における認知度は既には高水準となっているが、認知度 90%以上を保つことを設定とする。 把握については引き続き「C4th Home＆School」および「LoGo フォーム」の活用を想定し、市内の全小・中学生を対象に認知度調査を行う。					

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－Ａ：日本遺産「里沼」関連で開発された商品・サービス数（含む旅行商品）						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	38	52	59	64	69	74
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	民間事業者との連携により開発された商品・サービス数（含む旅行商品）、毎年度５件増を目指す。（累計） （旅行商品は旅行業者及び宿泊業者と連携）					

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－Ａ：日本遺産への協力団体数						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	765	816	871	881	891	901
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	日本遺産への協力団体数（ガイド団体・関係団体・民間事業者等）とし、毎年度 10 団体の増加を目指す。（累計）					

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－Ａ：地域の観光入込客数（千人）						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	1,127	1,449	1,219 ※12 月末現在	1,470	1,490	1,510
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	コロナ禍により激減した観光客は戻りつつあるもののそれ以前の数値まで回復しきっていない。 コロナ渦前の 2019 年度の 1,490 千人を基準とし、2026 年度には同水準まで回復し、翌 2027 年度は対前年度比 20 千人増を目指す。※観光入込客数調査により把握する。					

（３）地域活性化のための取組の概要

【地域の現状】

館林市では平成 30 年度（2018）に策定した歴史文化基本構想の元に、地域の特色である沼辺文化をパッケージした「里沼」のストーリーで令和元年度（2019）に日本遺産として認定された。これ以降、日本遺産「里沼」は総合計画をはじめとする各種計画において中心に据えられており、令和６年度（2024）に策定した文化財保存活用地域計画でも「日本遺産「里沼」の推進」が重点プロジェクトとして組み込まれている。これに則り、市および協議会では、日本遺産「里沼」の活用による地域の活性化を目標として活動を続けている。

≪今後３年間の主な取組概要≫

①人材育成と地域住民への普及啓発の更なる強化

【現状と成果】

地域プロデューサーや地域プレーヤーの育成とネットワークの構築を行い、特に学校教育の現場において、行政とプレーヤーが協働のうえ、「里沼」を会場としたフィールドワークや「里沼」産素材（ヨシ・小麦、館林紬など）を活用したワークショップを開催してきた。小・中学校で定着した「里沼」授業と合わせての実施依頼・実績は年々増加するなど、教育現場を中心として精力的に普及活動を行ってきた結果、地域の子どもたちにおける日本遺産「里沼」の認知度向上の大きな要因となり、子ども達の中からは「わたしたちのまちには日本遺産「里沼」があります」という発言を得るに至った。

【課題と今後の取組】

学校教育以外にあっても、地域での出前講座や一般年齢向けのワークショップの開催を通して全年齢に対する普及啓発を行っているが、そういった活動が届きにくい勤労世代の年齢層への普及は進んでいないきらいがある。

地域の未来を担い今後の後継者と成り得る子どもたちに対して、出前授業や体験活動を継続して行うに留まらず、地域の食文化にスポットを当てた「たてばやし「里沼」グルメブランディング事業」の実施により、地元産の小麦である「百年小麦」生産体験など、食

育事業として「「里沼」の味覚」や「地産地消」の重要性を体験してもらうことで、裾野を広げ続けながら親世代への波及を図る。また、日本遺産「里沼」構成文化財でもある「川魚料理（川魚食文化）」や「館林のうどん（麦食文化）」を通じた「里沼」ブランドの向上により、幅広い世代への普及を目指す。

②日本遺産ブランドを活用した「里沼」関連商品開発

【現状と成果】

日本遺産ロゴマークのみならず、地元高校生の作成した「里沼」のロゴマークをはじめ、「里沼」関連のPR媒体（幟旗・タペストリー・ステッカー等）を活用し、市内事業者を中心にまちじゅう全体で「里沼」を盛り上げる機運が醸成された。「里沼」関連商品も多数誕生し、認定当初に目標として設定した日本遺産「里沼」関連で開発された商品・サービス数は大幅に達成（実績59件/目標35件）。令和６年度には日本遺産「里沼」を介した事業者間でのマッチングによる商品開発（養蜂業と和菓子店）も行われるなど、今後も民間事業者にスポットが当たる展開が期待出来る。

【課題と今後の取組】

今後も日本遺産ブランドを活用した商品の開発やそのサポートを強化していく。また、日本遺産「里沼」関連で開発された商品の一つとして「里沼」関連ツアーがあるが、市や観光協会によるPR・モニターツアーを企画するも、コロナ禍の煽りにより一時実施が困難となった。その後に再開するも単発開催で安定的な開催に至っておらず、最も盛り上がるはずである認定直後の「里沼」ストーリーを体感いただくためのチャンスを逸してしまった感が否めない。

今後は「「里沼」旅行商品造成支援事業」により、民間事業者によるモデルコースの充実や新たな旅行商品の造成・充実のための伴走支援をしていくことで、海外を含めた外部からの誘客を図り、あらためて日本遺産「里沼」ストーリーを体感いただくことを目指す。また、日本遺産をテーマに連携を続ける群馬県桐生市・栃木県足利市[通称：両毛３市]や、関東近郊の日本遺産認定地（埼玉県行田市、栃木県宇都宮市・那須塩原市・益子町、茨城県水戸市・笠間市、東京都八王子市 等）でつながるツアー・イベントの実現に向けての調整も進めていきたい。

③観光拠点の整備充実

【現状と成果】

市内各沼における観光を目的とした拠点施設・サービスの整備を実施。令和５年度より開始した「里沼」来訪者数調査でも来訪者数が特に多いことが判明している城沼・多々良沼・茂林寺沼の３つの沼について重点的に整備を進めている。

❶城沼

国指定の名勝「躑躅ケ岡」を擁する城沼では、平成29年４月から休止していたサイクリングターミナルを指定管理者制度のもとリニューアルオープン。ネーミングも万葉集に詠まれた「里沼」の表現である「隠沼（こもりぬ）」になぞらえた「里沼リゾートHotel KOMORINU」に改め、宿泊や食事など観光の拠点として観光客の受け入れを再開した。

❷多々良沼

市内で最も周遊面積の大きい多々良沼では、コロナ禍において自粛生活を強いられる中、自然との触れ合いやウォーキング、サイクリングなど、癒しを求めた人々が多く集まった。コロナ禍収束以降は民間団体による観光イベントの実施やキッチンカーの出店が行われている。

❸茂林寺沼

古刹・茂林寺の傍らで、里沼の原風景を今に伝える茂林寺沼では、長らく多目的広場として存在していた南岸用地において利活用のためのインフラを整備。公募型プロポーザル方式で募集した民間事業者による新たな複合エリア「MORINJI PRAY」の運用に向けて動き出している。

【課題と今後の取組】

城沼では「里沼リゾート Hotel KOMORINU」が稼働しているが、茂林寺沼では施設の整備中であり、多々良沼では商業施設に乏しく、各沼を含む構成文化財における市内消費への貢献度はそのポテンシャルを発揮出来ていないことが痛感される。

今後は「「里沼」体感！コンテンツ開催事業」により「里沼」ならではの、「里沼」だからこそ味わう価値のあるコンテンツ、イベントやコト消費の拡充や、多々良沼におけるパーク PFI によるおもてなし施設整備検討や機能・サービスの充実により市内消費の活発化を図る。また、「里沼リゾート Hotel KOMORINU」及び同施設のキャンプ場も追加の整備を継続し、日本遺産「里沼」観光の拠点としてより多くの方に利用していただくことで、市内の構成文化財や食文化の体験につなげていくほか、群馬県が掲げる「リトリートの聖地・群馬」に共鳴し、同ホテルを拠点として観光のみならず、ワーケーションやウエルネスへの提案も行い長期の滞在も促したい。そして、つつじが岡公園は花の観光拠点として「北関東フラワーパークライン」に連なる茨城県水戸市、栃木県栃木市・足利市などを経由し群馬県各所と観光客の誘客のための連携を行う。

④インバウンド対応

【現状と成果】

第１期地域活性化計画では台湾・タイ・スペイン・アメリカをターゲット国と捉え、各種パンフレットやサイン、Web サイトの多言語化といった外国人観光客の受け入れ体制およびおもてなし体制の整備を進めた。

【課題と今後の取組】

認定後のコロナ禍により外国人観光客数が激減。収束後に台湾圏からを中心に少しずつ外国人観光客が戻ってきているものの、現時点で効果を測定できるまでの結果を得られていない。

今後も引き続き多言語化対応を進め、外国人向けモデルルートの充実など海外からの観光客受け入れのための体制を整えながら、積極的な情報発信を行っていく。特に、日本遺産「里沼」の誘客第一対象層は台湾としているが、館林市は令和５年度に台湾の雲林県と交流協定を締結している。館林日台親善交流協会を通して「里沼」の魅力を強く PR し誘客強化を図る。

（４）実施体制

【事業主体】館林市「日本遺産」推進協議会

構成員：館林市、館林市教育委員会、館林市議会、館林市区長協議会、館林商工会議所、邑楽館林農業協同組合、館林市観光協会、東武鉄道株式会社、東洋大学（国際観光分野有識者）、高崎商科大学（まちづくり分野有識者）、群馬地域文化研究協議会（歴史分野有識者）、館林つつじサポーターズ倶樂部、群馬県東部振興局、群馬県館林土木事務所

【日本遺産「里沼」タスクフォース】

※市の関係課で構成される日本遺産「里沼」事業における関係部署同士の情報交換・課題解決に取り組むチーム。

①組織戦略チーム：企画課・文化振興課

②観光事業チーム：市民協働課・農業振興課・商工課・つつじのまち観光課・文化振興課

③整備保全チーム：地球環境課・つつじのまち観光課・都市計画課・道路河川課・緑のまち推進課

④普及啓発チーム：秘書課・市民環境課・つつじのまち観光課・文化振興課

【部会】歴史文化部会：館林市教育委員会 文化振興課

観光産業部会：館林市経済部 商工課・つつじのまち観光課

【協力】地域プロデューサー、地域プレーヤー、ランドナビゲーター、民間事業者

地域ボランティア　　等

※地域プロデューサーについては以下の５名を任命。今後も各分野における地域の目線を持った人材を把握・任命し、それぞれを中心とした人材育成・事業継承を行っていく。

●水面利用等を含む新たな利活用と里沼の環境保全の融合を図る「「里沼」価値創造グループ」

■橋本淳司氏（館林市出身・水ジャーナリスト）

●次世代に向けた「里沼」や構成資産の価値を伝えるボランティア支援など、保護・継承に取り組む「「里沼」歴史文化継承グループ」

■岡屋英治氏（館林市在住・歴史文化アドバイザー）

■荒畑晋也氏（「里沼」資源活用体験アドバイザー）

■安樂岡紀子氏（館林市在住・「里沼」資源活用体験アドバイザー）

●専門知識を活かした「里沼」の魅力発信（シティプロモーション）に取り組む「「里沼」魅力発信グループ」

■小野真一氏（館林在住・イラストレーター）

協議会の円滑な事業運営と事業実施のため、内外の構成員との調整や事業全体の進捗管理のために行政が主体となって運営。

定期的な協議会開催により有識者の知見を得るとともに、日本遺産「里沼」タスクフォースにより関係部署同士で情報共有しながら、歴史文化の保存と活用に関する事業を歴史文化部会が、観光と産業の振興に関する事業を観光産業部会が、それぞれ地域プロデューサーや観光協会、商工会議所や民間事業者らと連携のもとで事業を実施。

課題として、現状では地域にDMOがなく行政が主体となって事業を実施しているが、今後はよりカスタマーファーストでのサービスの開発・提供のため、観光協会の法人化や発展形としてのDMO化、事業主体への参画推進のための検討を重ねていく。

［人材育成・確保の方針］

人材育成と確保にあたっては、地域プロデューサー主導による「ワークショップスタッフ養成講座」や「ランドナビゲーター育成講座」を実施することで新たな担い手の掘り起こしと人材確保、事業継承を行う。

学校教育の現場では、出前授業とワークショップ、フィールドワークを組み合わせた出前授業により、地域の子どもたちの日本遺産「里沼」に対する認知と理解を高め、シビックプライドの醸成とともに次の世代への人材育成へと繋げていく。

また、今後も地元を中心とした大学・高校との連携を継続する。地域プロデューサーが教鞭を取る武蔵野大学サステナビリティ学科ではラボ生による「「里沼」サステナブルインターンシッププロジェクト」の実行を準備中。地域外の学生の積極的参加による課題解決や、交流による活性化を目指すなど、市内外を問わず人材の育成と確保を実行していく。

【高校・大学との連携例】

群馬県立大泉高校：「里沼」産ヨシを素材とした「ヨシストロー作製」、「キクラゲ栽培」、「バイオ燃料作製」

関東学園大学　　：「ヨシストロー」を用いた飲料の開発と販売

武蔵野大学　　：環境サステナビリティ学科による「里沼」を舞台としたサステナビリティツアーの実施　　等

（５）日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

【自立・自走に向けた現状と課題】

活動面の自走においては、地域プロデューサーを中心に「里沼」で活動するプレーヤーのネットワークを最大限活用しながら、異なるプレーヤー間での関係構築及び連携促進を図っている。資金面での自走においては、ふるさと納税や企業版ふるさと納税により財源を確保しており、歴史文化を活かした返礼品を創出することで、より多くの方に協力いただける体制を整えたい。

同時に地域の宝である日本遺産「里沼」の活動継続の重要性をより多くの人に理解してもらい、清掃や保全といった「里沼」関連活動に参画してもらうことで、本来かかる費用を抑え、限りある予算を有効活用できる仕組みづくりに注力していく。

再述となるが、現状では行政が主体となって事業を実施している。観光協会の法人化・DMO化、協議会の外部委託などについて、先進認定地の取組を参考にしながら持続可能な組織作りを研究していく。

（６）構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組
構成文化財の保存・継承に関しては、文化財の所有者・継承者等への支援制度の拡充として、文化財継承制度の創設を検討する。会社経営・商業などの事業承継のように、文化財管理や伝統芸能等の後継者マッチング支援制度の創設を検討し、地域のなかで文化財を守り、伝える体制を整える。 また、日本遺産「里沼」では地域プロデューサー主導での「里沼」地域素材を活用したワークショップが活発化しており、活用による保存・継承の好循環を生み出している。 ワークショップの素材には主に「ヨシ」や「館林紬」が使われる。「ヨシ」は構成文化財でもある各沼に群生し水質浄化という重要な役割を持ち、茅葺屋根や簾、農家の肥料や燃料として地域で活用されることで循環していたが、近代化に伴い地域での活用が激減。ヨシ焼きの行えない茂林寺沼では環境保全のため公費で除草、運搬、焼却処分している。「館林紬」は構成文化財の一つで、昭和中期頃は大衆向けの価格で手に入り、品質でも結城紬に劣らないことから「館林結城」と呼ばれるほど評価され各地から注文が殺到したが、洋装の定着により減衰、生産は途絶え取扱業者は１社のみで高齢化や後継者不在などの問題にさらされている。 そんな中、ワークショップの開催は、地域素材の持つ魅力の再発見と課題提起の効果を持ち、参加者におけるシビックプライドの醸成と共に、関連する構成文化財の保全活動へ繋がる足掛かりとなっている。 「ヨシ」に関しては、令和６年度は「ヨシ工作スタッフ養成講座」を開催すると、受講者自身の意向により、活動（ワークショップ用素材確保のために行われるヨシ刈り）への参加が見られ、「館林紬」に関しては、その伝統を絶やすまいとして民間事業者が合同会社を設立。協議会の実施するワークショップにも協力しながら、地元の高校や企業などとコラボレーションし、地域の伝統的な織物への関心を高めようと普及活動を行うなど、課題解決に向けた行動が始まっている。

（７）地域活性化のために行う事業

（７）－１　組織整備

（事業番号１－Ａ）

事業名	持続可能な組織体制の構築
概要	日本遺産の事業を推進するため、地域全体を統括する協議会と関係団体、民間事業者が一体となって、持続可能な組織体制の構築を図る。

	取組名	取組内容	実施主体
①	協力団体との連携の強化	日本遺産に係る団体や民間事業者、個人からの協力を得て、各分野での日本遺産事業における協力体制を強化する。	協議会、市、商工会議所、関係団体、民間事業者
②	民間事業者を交えた事業推進体制の構築	協議会は行政を中心として組織されているが、今後の展開を見据え関連する民間事業者を巻き込んだ体制の構築を図る。	協議会、市、民間事業者
③	事業予算の確保	ふるさと納税の申込者増加を狙い、歴史文化を活かした魅力ある返礼品を創出するなど、自走に向けた財源確保体制を構築する。	協議会、市、民間事業者

年度	事業評価指標	実績値・目標値
2022	日本遺産への協力団体数（ガイド団体・関係団体・民間事業者）	765 団体
2023		816 団体
2024		871 団体（見込み）
2025	同上	881 団体
2026		891 団体
2027		901 団体

事業費	2025 年度：1,000 千円　2026 年度：1,000 千円　2027 年度：1,000 千円
継続に向けた事業設計	「里沼」で活動するプレーヤーらのネットワークを最大限活用しながら、異なる分野間での関係構築及び連携促進を図り、民間事業者も交え地域一体となって各種事業を推進していくための体制を整える。

（７）－２　戦略立案

（事業番号２－Ａ）

事業名	行政計画への位置付けの明確化と整理
概要	日本遺産「里沼」推進のための戦略の立案をしていくうえで、上位計画への位置付けを明確化し整理する。また、それを協議会構成員や関連団体で共有し、戦略を立案し実行していく。

	取組名	取組内容	実施主体
①	行政計画への位置付けの明確化と整理	各行政計画における日本遺産「里沼」の位置付け、意義や役割を明確化し整理する。	市
②	情報の共有と実行	明確化した情報を協議会内で共有することで、共通認識を持って計画における各々の役割を実行する。	市・協議会

年度	事業評価指標	実績値・目標値
2022	日本遺産の位置付けを明確化した行政計画の数	3 件
2023		4 件
2024		5 件
2025	同上	6 件
2026		6 件
2027		6 件

事業費	2025 年度：1,000 千円　2026 年度：1,000 千円　2027 年度：1,000 千円
継続に向けた事業設計	各行政計画における日本遺産「里沼」の意義や役割について位置付けを明確化し、日本遺産「里沼」ブランドを活かした事業推進の根拠を固める。

（７）－３　人材育成

（事業番号３－Ａ）

事業名	日本遺産「里沼」に携わる人材の育成
概要	地域プロデューサーや地域プレーヤーの育成・支援を行い、それらと協力しながらの、小・中学生を対象とした事業の実施や、周辺の高校・大学生と連携した事業展開により、若い世代が日本遺産ストーリーや構成文化財に触れる機会を創出することで、シビックプライドの醸成とともに将来的な担い手としての人材育成・確保を目指す。

	取組名	取組内容	実施主体
①	小・中学校での出前授業の実施	日本遺産ストーリーの座学と、地域資源を用いたワークショップ、フィールドワークを組み合わせた授業を実施する。	協議会、市、関係団体
②	高校生と連携した事業の実施	高校生による地域資源を活用した商品開発や持続的な販売促進の支援等を行う。	協議会、市、関係団体
③	大学生と連携した事業の実施	大学生による構成文化財での体験プログラムの創出と実践、課題の抽出と解決方策の検討といった取り組みの支援等を行う。	協議会、市、関係団体
④	地域プレーヤーの活動支援	「里沼ランドナビゲーター」として育成してきた人材において活動を支援し、更なるスキルアップを図る。	協議会、市、関係団体
⑤	地域プロデューサーの活動支援	地域プロデューサーの活動を支援し、各事業分野での展開を促進することで、地域住民の参画推進を図る。	協議会、市、関係団体

年度	事業評価指標	実績値・目標値
2022	学校教育と連携し「里沼」をテーマに行った座学、ワークショップ、フィールドワーク等の回数	9 回
2023		15 回
2024		18 回
2025	同上	20 回
2026		20 回
2027		20 回

事業費	2025 年度：2,000 千円　2026 年度：2,000 千円　2027 年度：2,000 千円
継続に向けた事業設計	地域で活躍する人材の活動を支援し、またその成果をもって子どもや若者を対象とした取組みを行うことにより、将来の日本遺産「里沼」を担う、次世代の人材育成の活動を学校教育と連携しながら行う。長期的には開発された商品や有償ガイドによる収益化を期待する。

（７）－４　整備

（事業番号４－Ａ）

事業名	日本遺産ストーリー体験のための基盤整備
概要	地域内外の来訪者に日本遺産のストーリーを体験してもらい、構成文化財の保存と活用のための基盤を整備する。

	取組名	取組内容	実施主体
①	日本遺産「里沼」情報発信センターの整備	既存の情報発信センターやサテライト展示会場において、最新の情報を広く普及できるよう更新していく。	協議会、市
②	案内板・サイン整備	各構成文化財において、音声ガイドなどを用い、来訪者の関心を得る案内板・サインを整備する。	協議会、市
③	日本遺産関連施設の修繕	老朽化した構成文化財などの施設価値を維持しながら修繕することで、施設の利活用の場としての機能を整える。	市、協議会
④	多言語化等によるパンレット作成	国外来訪者へ日本遺産ストーリーを伝え、おもてなしするため、ニーズに合わせた、多言語化パンフレットを作成し、ソフト面での整備を整える。	協議会、市

年度	事業評価指標	実績値・目標値
2022	構成文化財の活用が行われた数	25 件
2023		31 件
2024		30 件（見込み）
2025	同上	30 件
2026		30 件
2027		30 件

事業費	2025 年度：3,500 千円　2026 年度：3,500 千円　2027 年度：3,500 千円
継続に向けた事業設計	日本遺産のストーリー体験の拠点となるセンターや構成文化財の適切な保存と整備を行い、民間事業者等による活用に繋げることで地域経済の活発化を期待し、長期的には収益の構成文化財への還元を目指す。

（７）－５　観光事業化

（事業番号５－Ａ）

事業名	日本遺産のストーリーを体験するコンテンツの提供
概要	地域内外の人々に日本遺産のストーリーを体験してもらうコンテンツの提供により、経済効果を生み出すための取り組みを行う。

	取組名	取組内容	実施主体
①	「里沼」グルメブランディング	食を通じた「里沼」ブランド力の向上と、農作物の生産体験などの食育事業により、「里沼」の味覚や地産地消の重要性を普及しながら、観光誘客につなげる。	協議会、市、関係団体、民間事業者
②	旅行商品の造成支援	「里沼」旅行商品を販売する旅行業者に対し、旅行商品の造成支援を行う。	協議会、市、観光協会、民間事業者
③	「里沼」体感！コンテンツの開催	日本遺産「里沼」を生かした新たな体験コンテンツ事業を提供し、来訪者の満足度を高めるメニューをパッケージ化し、事業を展開する。	協議会、市、観光協会
④	構成文化財に隣接する観光地（市有地・市有施設）の整備	民間活力による新エリア「MORINJI PRAY」を新規開業。観光地として長期にわたり全国から誘客を図れるよう事業を実施する。また、昨年に営業を開始した「里沼リゾート Hotel KOMORINU」ではキャンプ場等の追加整備を行い、更なる顧客獲得を図る。	民間事業者、観光協会、市、協議会
⑤	二次交通の充実による利便性の向上検討	里沼を結ぶ周遊巡回バスを試験運行する中で、バスの需要を調査し、将来的な地域振興につなげる。 また、観光協会により、里沼周辺でのレンタサイクルの貸し出しについても積極的に対応を図っていく。	商工会議所、民間事業者、観光協会、市
⑥	リトリート等の観光商品の開発・販売	新たな観光キーワードとしてリトリート体験を提案し、沼辺での滞在スタイルの幅を広げるなど、観光コンテンツの拡充を図る。	民間事業者、観光協会、市

年度	事業評価指標	実績値・目標値
2022	日本遺産を体験・体感するコンテンツの実施数	10 件
2023		10 件
2024		11 件（見込み）
2025	同上	12 件
2026		12 件

2027		12 件
事業費	2025 年度：2,300 千円　2026 年度：2,300 千円　2027 年度：2,300 千円	
継続に向けた事業設計	コロナ禍によって一時は観光客が激減したものの、日本遺産認定を契機とした「里沼」周辺の整備や各種取組みにより、観光客も戻りつつある。今後も観光客のニーズに対する課題を整理しながら、来訪者の満足度につながる効果的な事業を実施する。	

（７）－６　普及啓発

（事業番号６－Ａ）

事業名	関係団体や学校教育との連携による日本遺産「里沼」の普及啓発
概要	児童・生徒や地域住民における日本遺産「里沼」の認知度を高め、シビックプライドの更なる醸成のため、継続的な普及啓発を実施する。

	取組名	取組内容	実施主体
①	総合学習授業、出張講座の実施	小・中学校における総合学習や公民館での出張講座などを積極的に実施し、地域内での普及啓発に取り組む。	協議会、市、関係団体
②	市内小・中学校教員向け講座	教員向け講座を実施し、教員自身が二歩に産「里沼」を題材とした授業を行えるよう、教員向け講座を実施する。	協議会、市、関係団体
③	「日本遺産」シンポジウムの開催	近隣の日本遺産認定地である群馬県桐生市・栃木県足利市と連携して両毛３市日本遺産シンポジウムを開催する。（令和２年度より継続実施）。	館林市、桐生市、足利市、（各市協議会）

年度	事業評価指標	実績値・目標値
2022	小・中学生における日本遺産「里沼」の認知度	87.29%
2023		91.85%
2024		92.16%
2025	同上	90%
2026		90%
2027		90%

事業費	2025 年度：1,800 千円　2026 年度：1,800 千円　2027 年度：1,800 千円
継続に向けた事業設計	引続き関係団体等と連携を図りながら、各種イベントや講座などによる普及啓発を行うことでシビックプライドの醸成図り、継続的な普及啓発を実施する。

（７）－７　情報編集・発信

（事業番号７－Ａ）

事業名	ＨＰ等における情報発信
概要	日本遺産のストーリーに関する基本情報や、ガイドの申し込みなど、来訪者が必要とする情報を取得できるようＨＰ等で魅力情報を発信する。

	取組名	取組内容	実施主体
①	公式 Web サイトの継続的な更新	ストーリーや構成文化財や観光･イベントなどの最新情報を更新、ガイドの申し込み機能の追加など、「里沼」情報を一括発信できるサイト構築を図る。	協議会、市
②	SNS を活用した情報発信	公式 X によるリアルタイムでの情報発信や公式 HP とのクロスメディア、全国の認定地との相互フォローにより、効果的な情報発信をさらに拡大する。	協議会、市
③	PR イベントへの参加	日本遺産フェスティバルをはじめとした機会を逃さず、積極的に参加して地域外への PR を継続する。	協議会、市
④	広報紙等による日本遺産ストーリーの情報発信	広報紙等の活用により、日本遺産のストーリーを発信し、地域住民の理解度向上を図る。	協議会、市

年度	事業評価指標	実績値・目標値
2022	日本遺産及び協議会 HP のページビュー数	130,188PV
2023		227,507PV
2024		376,364PV（R7.1 月末）
2025	同上	420,000PV
2026		440,000PV
2027		460,000PV

事業費	2025 年度：2,400 千円　2026 年度：2,400 千円　2027 年度：2,400 千円
継続に向けた事業設計	日本遺産公式 Web サイト等を随時更新し、各種 SNS との相互リンクによる効果的な情報発信を実施する。また、PR イベントへ参加することで対外的な認知度の向上、広報紙等を活用した紙媒体での情報発信による地域住民の理解度向上を図る。